

△対談▽

宗教における魔・悪魔の問題（下）

西谷 啓治
阿部 正雄

十五、空の自己焦点と神および自己

西谷 それから、さっきいった第二の点ですね。さっきの絶対無の自己焦点と西田先生のいわれたところ、そこは、宗教の立場でいえば、宗教的な世界観のところ、神というものが考えられる。例えば世界を創造し支配する神というようなものですね。しかし宗教は自分の靈魂の所在ということの問題だから、その絶対無の自己焦点のところは、真の神とか仏とかが考えられる反面に、自己というものがほんとうに自覚されるところでもある。

しかもそれは、昔からの思想でいわれる神人合一のミスティック、神秘主義というのとは違う。そうすると、絶対無の自己焦点といわれたところの自覚とは、どういうことか。その点はどうですかね。つまり、それが端的にそれ自身をあらわす場合、これはどうなんでしょう。たとえば「神」だったら、神の自己顕示とか、啓示、オッフェンバールンクとかいうことが昔からありますね。仏の場合だったら、仏のお告げだとか、あるいは仏の広い意味での廻向、仏から衆生の方へ向かって何か働きかけてくるという、仏自身の功德を廻付する、そういう廻向

という考えが昔からあったわけですね。あなたの場合は「空」とか「絶対無」とかが基底（むしろ無底）になるわけだから、啓示とか廻向というだけでもない。とにかく、キリスト教的な意味での神が自己を現わし示すというのとは、かなり違うはずだし……。

阿部 先生がおっしゃるように、そこは啓示の神とか廻向する仏とかいうのでは、ちょっと当たらないですね。

絶対無の自己焦点というのは、むしろ久松先生のいわゆるような無相の自己というべきではないかと思えます。無相がほんとうの主体であるところでは、空は無相の自己として結晶する、自己焦点を結ぶ。それではじめて空は真の意味の空になるので、そうでなければただの空々漠々というネガティブなものになりますからね。それはまた西谷先生のおっしゃる根源的主体性だといってもいいと思うのです。根源的主体性というのは、空の自己焦点として結晶した中心、だからそれは啓示の神とか廻向する仏ではないわけです。

西谷 自己ということですか。

阿部 そうです。それは、ほんとうの自己ということ

ではないでしょうか。つまり啓示する神とか廻向する仏に相對する自己ではなく、空の自己焦点としての自己ですね。ただその場合、さきにいいました空の自己焦点としての人格的神ということのかかわりはどうなるのかというむづかしい問題が出てきますが……。

西谷 さっきお話に出ましたが、仏教では即身成仏義というのがありますね。例えば日蓮宗でも真言宗でもそうらしいが、そういう方向とはどうですか。「即身」というのだから、非常に直接的な形ですね。

阿部 日蓮の場合だと、久遠実成の仏ということでしょうか。そこで即身成仏ということがいわれていると思うのですが、私よくわかりませんが、久遠実成の仏というのは、これはやはり空ですか。

西谷 空という言葉は、もしそれを空と置いてしまえば、さっき焦点とか結晶とかいわれたようなものがなくなって、空々漠々としたような（笑）……。

阿部 ええ、私がうかがいたいのは、久遠実成の仏というのは、たとえば阿弥陀仏などと一応肩を並べる——という用語弊があるかもしれませんけれども、阿弥陀仏

などにあたるようなものなのか、つまり、報身仏なのか、あるいは報身仏のもうひとつ奥にある法身仏、ダルマカーヤであるのかということですが。

西谷 そういうカテゴリーだけでは足りないという感じがありますね。だって法華経でも一乗という。なんでも一応は絶対的な一元にまで徹底する。三身ということが一つになったようなところを抑えてないと不満足が残るという意味じゃないですか。

編集部 三身即一身という言葉もあります。

西谷 だからそういう形でないと久遠実成ということはいえないかも知れませんね。久遠といえば法身だが、それだけだとか遠い感じで直接性がない。実成の面を切り離して取ると報身になるのかも知れないが、久遠という感じが弱くなる。それで結局、三身即一身という形になる。キリスト教の三位一体の考えもそうですが、仏教でも大乘の立場だとやはりそういうことになる。しかし問題になるのは、そこへ更に即身成仏といわれたようなことが結びつく。その点はどうなんでしょう。

阿部 大日如来、それは即身成仏ですね。

西谷 大日如来にはいろんな働きがある。大日如来の法身説法ということまで言う。仏の働きがわれわれ衆生の身口意の働きにまで繋がってくる。あなたの無相というのにもそういう一面があるわけですか。

阿部 そこはおそらく、大日如来の場合も別物ではないと思います。ただ大切なのは、いかなる相もない、だからいかなる対象性もないということ、それを徹底させなければいけないと思うのです。阿弥陀仏を信ずるという場合も、それ自体がどれだけ信仰として深くても、なおそこに他から区別された「阿弥陀仏」という一つの相、相ならぬ相を免れていないという意味で、それは真の究極的根拠にはなりえない。そこに、そのような報身仏の裏に魔が自覚されざるをえない所以があるわけですが、魔というのも、なお「魔」という相があるわけですから、そのような相も脱却されなければならない。そこに仏にも非ず魔にも非ずという自覚を介して、はじめていかなる相をも脱却した真の無相がそれ自体として自覚されてくるのではないのでしょうか。

西谷 そのことはばくも無相ということではわかんこ

とはないと思います。ただ、その無相の自覚には、無相が現成するというか実成というか、とにかく無相がほんとうに現われてくるということはあるんでしょね。さつき啓示という言葉を出して、その言葉が当たるかどうかかわからないが、とにかくそういうことが問題になる一面があるんじゃないか。それがないと一種の観念、無相の相という観念になる惧れがある。「即身」的な直接性がなくなる。

阿部 それは、おっしゃる通りだと思います。もし無相にとどまっていたらそれも一つの相になってしまいうわけですから、無相も否定されて、自己焦点を結ばなければならぬ。空も不断に自らを空じて有に転じなければならぬ。仏教でいえば真空妙有といわれることではないかと思ひます。そこでは、ほんとうの自己とさまざまなものが、同時に妙有として成り立ってくる。そしてだれでもが、そういう意味の空の自己焦点としての無相の自己であるということが本来のあり方ではないでしょうか。

西谷 それはそうとして、それが真の神だ、と……。

阿部 それはちよつと言ひ方が当らないのではないか

ンターク……。

阿部 ええ、フレデリック・ソントークという人。クレアモントのボモナ・カレッジの哲学の教授ですね。

西谷 あの人の本、『悪魔の神』でしたか。

阿部 そうです。『ゴッド・オブ・デヴィル』。

西谷 あれはさっきのサルトルの『有と無』なんかと関係がある。サルトルのは無神論の立場ですね。唯物論的なヒューマニズムというのかな。ところがソントーク氏はその影響を受けとめて、新しい神観念ということを書いて問題にしているわけですね。その新しい神観念というのは、やはり Being という大きな有だが、これまでの人々と違うのは、ノン・ビーイングということとを非常に問題にしている。具体的な細かい議論には一々立ち入れないが、とにかく、神はビーイングであると言ふ時のその神が、見方によると、あなたの考えに似ているような感じがなくてもいい。ビーイングということがいわば一種の焦点みたいな意味合いのものになっている。氏の場合は神の問題だから焦点はどうしてもビーイングということになりますが、ただそこで近代無神論と

と思いますが。

西谷 真の神でいいかとぼくは訊いたんですが。

阿部 神という言葉の意味にもよりますが、真の神だとは言えないのではないかと思います。いわゆる覚者という意味でいえば、真の仏ということがいえるかもしれないけれども……。

十六、神の新しい観念

西谷 それはさっき言ったように、「神」の新しい観念というような問題だということなら、それでもいい。新しい神観念といつても、「神」といわれるものについての新しい解釈の問題ですね。現代の問題状況では、「無神」ということの新しい観念も問題になり得る。今までの無神論は今までの「神」の存在を否定するということだったが、現代では新しい「無」神観念への方向も不可能ではない。その方向から新しい神観念も生れるかも知れぬという意味を含めてですね。仏教が「無神論」だと言われることも、そういうコンテクストのなかで本当の問題になるかも知れない。あなたがよく御存知のソ

いうのが問題になる。その無神論は従来の神観念というものをすっかり否認しているが、氏はこれは尤もだと評価している。その否認の理由は非常に明白で、それを否定することはどうしてもできないと言う。そこでどうしても無神論というものを一ぺん通ることになり、そのときはノン・ビーイングが重要な事柄になる。ところが昔の観念からいえば、そのノン・ビーイングはやはり悪魔ということになるのでしよう。そこで無神論とともに、デヴィルということが出てくる。現在の無神論は自分をデヴィルなんていうものとは思っていないわけですが、しかし昔の観念でいうと神が潜んだ状態にいるという……。

阿部 そうですね。神が潜んでいるということですか。

西谷 そこでこんどは、新しい神が出るときに、デヴィルというものが積極的な役割をもつて入ってくる。そしてその場合デモクラシーというものが問題として介入してくるんですね。

阿部 デモクラシーが……。

西谷 民主主義ということをソントーク氏は強調している。いまの時代は民主主義だということ、それが非常に重要な問題で、民主主義では、人間はめいめいが自主的になってくる。そして万人がレベル・アップして平均化してくる。昔の場合だと一種のヒエラルヒーがあり、高い低いの身分の段階があった。そして今までの神の觀念も、そういう位階制を基盤にして成り立っていた。位階制をずっと辿って行くと、いちばん頂点に行くと、そのところが最高の善であって、いちばん美しくいちばん完全である。そのいちばん高いところ、そこが神の座である。今までは大体こういう考え方だった。だが、そういう上下の段階というヒエラルヒーはアリストクラティックな考え方で、それではないのだ、というわけです。現代はすべての人間がそれぞれ独立になった。それがデモクラシーで、そのデモクラシー社会というのは一般大衆の社会、美とか真とか善とか、そんなことにあまりかまっていないような大衆社会になる。そういう点を今までのキリスト教はあまり重要視していなかった。「貧しき者は幸いなり」という觀念があること

はあるが、少なくとも今までの神学というものは、さっきの高いところで神を考えていたので、デモクラシーになって近代の社会が出てきたとき、全然見方が喰い違う。モラルということでも、どろどろしたものがいっぱいある段階では、モラルも根本的に違ってくる。それで無神論も起こるし、近代のいろんな社会問題も起こってくる。それをどうしたらいいかということで、いろいろあの本で言っていましたね。ぼくはざっと読んだだけで、記憶も不確かですけれども……。

あの本で特に面白かったのは、あの本の根本の方向でですね。今までの神学では現代にはだめだ、現代では、神は死んだというふうなことがどうしても出てくる。無神論がいろいろ言い立てていることには、みんな否定できない理由がある。だから、それを一応すつかり受けとめて、自分の事柄にする。さっきの底辺のところへ一ぺんかえって、そこをふまえて神というものを新しく考え直す。そういう態度ですね。そう言っても、ぼくの読んだ感じでは、結局、神というものの基本的な考えは変わっていないんで、たとえば神はビーイングとして初めから

規定されている。ただ、昔の考えのように高い特別な存在ではなしに、同時に一般大衆の泥まみれなビーイングとも直結している、そういう神ということだったかな。

例えばあの本では民衆の苦しみとの連関で、「苦」サツフアリングとすることを非常に問題にしている。キリスト教でもキリストの受難ということで「苦」の問題は含まれています、あの本では「苦」の見方になんとなく仏教的な感じがしたような記憶がある。

阿部 おそらくテイリツヒなんか通っているのですよね。テイリツヒのグラウンド・オブ・ビーイングとか。

西谷 あの本には、もうひとつピンとこない感じのするところもある。例えばさっき問題になった「神の人格性」パーソナリティー、それもちやんと入っていて、それがいわゆる全智全能みたいな神の性格と結びついている。神の超越性ということも入っている。やはりどこか昔からの神觀念が基本にあるみたいな感じですね。民衆的な社会をふまえてということだが、その基本のところがある一つピンと来ない。

阿部 大きなフレームワークは残っているわけですが

ね。

十七、仏と魔と空

西谷 あなたの場合はその点、空といわれたりして非常に違うわけですが、ただその場合にも、さっき言ったパーソナリティーの問題とか、妙有といわれた事柄とか、そういうなかにも、やはりビーイングということの問題が入ってくる。これは伝統的な「ほとけ」というものの性格でもあったわけですかね。とにかく、その辺のところはソントークの場合などと対比しても基本的に違うという場合に、その違いがどういう形で現われるかということですね。これは「ほとけ」の場合ですが、似たような問題は魔の場合にも……。

阿部 そこはこの前ちょっと……。

西谷 無相の自己といわれているものを、いろいろな問題との繋りのうちで周囲から照らして説明することになると、そういう基本的な問題がいろいろ究明を要求されてくるんじゃないか。キリスト教の場合は、基本的には一応ティスミス(有神論)ということでしょうが、仏教

は無神論だといわれるくらい様子が違いますから、悪魔や魔の問題でも、仏教の場合は、キリスト教が神とサタンと言うのと問題の出方そのものが既に違っているところがある……。

阿部 仏教の場合でいえば、さっきの報身仏的な立場と、そして空の立場とですね。たとえば真宗なら報身仏を中心にして、そこから空もその奥のほうに見るという形になっておりますね。そこでは、空にタッチしているかもしれないけれども、ほんとうに空を空として自覚していないのではないかと思うのです。空を空自体として自覚するためには一たび報身仏の立場を破るというか、超える、そしてほんとうに空の側に立つ空と自己が一つになる、ということがなければならぬと思うのです。ただそうなるには連続の道はないのであって、どうしてもそこに報身仏の裏に潜む魔の問題を自覚的に超えなければ、報身仏を突破して空自体に立つということはできない。逆に本来空自体に立つという禅的立場は、それだけだとそれこそデモ・ニツシェになる恐れがあり、あるいは陰魔になったり天魔になったりする。そこに古来頑

空とか但空とか悪取空とかいって、きびしく戒められているところがあると思います。空もまた自らを空にしなければならぬ。「空」というのは名詞でなしに、空ずるという動詞形で受取るべきではないかと思うのですが、空がみずからを空ずるところに当然焦点が結ばれてくる。それは真の自己とよんでよいと思いますが、そのような空の自己焦点を根拠として初めて時間も空間も成り立ってき、価値の序列も基礎づけられてくる。ただそのようなグルント自身が、空というウングルントの働きとして成り立っているということが、たえず明らかになっていなければならないのではないか……。

西谷 グルント (Grund 根柢・根拠・理由) という言葉、従ってまたウングルントという言葉も、哲学的には問題を孕んだ言葉ですが、それはともかく、今言われたような考えは、方向としては西洋にもなかったわけではない。ウングルントというドイツ語を初めて使ったのは、さっきいったヤコブ・ベームですが、そのベームの思想は今いわれたのと似ているところがある。神は一切のものを一番根源のところから根拠づけているウルグルン

ト (Urgrund 根元底) であり、そのウルグルントはウングルント (無底) であると言っている。その辺に彼の思想の特色が現われている。万有の根元底が同時に無底であると考えるところに悪魔の問題が絡んでいる。

阿部 ぶつかる問題なんですね。

十八、悪魔は墮落した天使

西谷 キリスト教では魔の問題というのは、聖書の一部になっている「黙示録」、あの辺に強烈な形で現われていますね。宗教を基礎にした一種の歴史観、世界観的な歴史観で、歴史の現実状況への解釈と将来への予言とが一体になっている。いわゆる「最後の審判」に向かいつつある歴史ということですね。とにかく、そういうような歴史のヴィジョンのなかにサタンも出てきて、神と並んだ根本的な役割を担っている。「サタンの深み」、デップス・オヴ・サタンというような言葉も出ていたような気がします。聖書にあるそういう歴史的なヴィジョンが源になって、キリスト教の歴史ではその後もいろいろと黙示録的な史観の伝統があったので、ベームの思想も

そういう伝統を受けついでいるわけですね。なにしろ中世末期から文芸復興へ、さらに宗教改革へと、動乱の続いていた時代ですから、歴史の将来への予言とか終末観とか、強い黙示録的な雰囲気があって、そのなかから悪魔というものが出てきた。悪魔、サタンはもとは大天使だったのが……。

阿部 ルチファーですね。

西谷 大天使のうちいちばん美しい天使で……。

阿部 たしか、三大天使のうち、その中間の天使ですね。光の天使。

西谷 その「中間」ということがまたいろいろな思弁の対象になったらしいが、その天使があまり自分が美しいもんだから、うぬぼれを起して……。

阿部 神になろうとして。

西谷 神の座につきたいという野望をおこして、その野望のために大天使の座から地獄の一番深い底まで落ちてしまう。そういう神話ですね。

阿部 悪魔は墮落した天使である、もと天使であった。それが墮落というか落とされて悪魔になった。

西谷 ベーメはその問題を、やはりあなたのいわれたようなことですが、神と神以下のものとの関係ではない、「神対神」と述べて、ゴット・ヴィダー・ゴット（神と神との間のあらがい）として受け取っている。

阿部 それは実におもしろいですね。そこまで行かないと本当の神の問題もわからない。

西谷 そういうことで、悪の問題をずっと考えていくと、そしてその問題の解決と結びついて神というものを考えて行くと、どうしてもウングルトということになる。自分も神になろうとして神に反抗する悪魔、神の座を神と争う神、というような問題を克服するところで神を考えようとして、ベーメがその言葉を出して来た。だからあなたの場合と問題は似ている。

阿部 非常に似ているように思いますね。

西谷 ベーメの影響というのは、とても大きかったように、英国などにも大きな影響を及ぼした。

阿部 ウィリアム・ブレイクほどですね。

西谷 ブレイクなんかもそうですね。ブレイクの言葉だと『天国と地獄の結婚』とか、とにかく両極の対立を

超えたところが問題だったんですね。そういうこともあるし、そこから尾を引いて、ワーズワースとかその他いろんな人につながっている。北欧のベーメ主義者ではスエーデンボルグ。この人の影響も大きく現代まで続いています。当のドイツでも、シュワーベンその他の地方に影響を受けた神学の流派ができて、いろんな人が出たらしい。哲学史の上でもベーメの影響はいろいろいわれていますが、特に十八世紀の末から十九世紀の初めにかけて、フランス・バーダー、その友達であったシェリング、或いはヘーゲルなんかも影響をうけている。ぼくが昔訳したシェリングの『人間的自由の本質』、あれなんか悪の問題ですね。悪の問題を「神のうちの自然」という観念で神と結びつけて……。

阿部 ナツア・イン・ゴットということでしたな。

西谷 あれもベーメの系譜に属していると言えるわけです。神のうちに「Existenz」としての神——これは従来伝統的に神と言われたものですが——それと「神のうちの自然」——これは悪の問題が神と結びつく接合点です——との二元を考えて、最後に神そのものの一元のと

ころへいくと、インディフェレンツ、つまり二元性を超えた無差別としての神、さらにそこからウングルトということになる。ただの無差別というだけでなく、それが自覚的になる。あなたのいわれたのとちよつと似ているような気がします、そのところでベーメのウングルトという言葉が出てくる。神というものの上で善と悪の問題を追及して行つて、最後にいわば善悪の彼岸としてのウングルト。具体的にいうとキリスト教でいう「愛」です。インディフェレンツ（無差別）というのが既に愛で、愛というのは善いものも悪いものも等しく平等に見る善悪の彼岸で、そういう無差別愛が自覚的になつてウングルト（無底）としての愛が出てくる。シェリングはキリスト教ですから、ひどく苦労して考えていますが、あなたの場合は仏教の立場だからもっと端的に考えやすい——というだけでも、とにかくそういうところがある。

十九、空の自己展開としての願と行

阿部 さっきの空の自己焦点ということですが、それ

は別の言葉でいえば、願ということになるのではないかと思います。空が空にとどまっていなくて、空自身を空じたとき、それは願になる。すべての人もひとしく空にめざめるようにという願になると思うのです。ですから願にならないような空は、ほんとうの空とはいえない。ほんとうの空ならばそれは当然、すべての人を同じように空にめざめさせずにはおかまいという願に結晶してくるはずだと思います。また願はただ願にとどまっていなくて、それ自体を空じて、こんどは行になり、実際に何かを行なう。行にならないような願はほんとうの願とはいえない。そのように空は願になり、願は更に行になつていく。これは空が何かその外に出ていくということではなく、空の自己内展開として空自身の中に自己焦点をむすんでいくことではないかと思うのです。つまり、それこそが空のやむにやまれぬ働きだと思うのです。さき程来、絶対無、又は空の自己焦点は、新しく捉え直された人格的神であるといったり、直の自己ではないかといったりしましたが、この両者のかかわりをどう捉えるべきかは、実は私自身もまだ十分つきつめて考えて

いないのです。ただ、今のところ、言えますことは、この両者は空の自己展開としての願として同時に押えることが出来るのではないかということです。これは私自身今後の課題にしたいと思っています。ともかく、空はまず願として自己焦点をむすび、更に行として結晶していく。これは、勿論時間的な前後関係があるようなものではなく、本来一体不可分な空の働きであるわけですが、浄土真宗などの場合はむしろこの空の働きの全体を願のところで抑えるわけですね。そこが真宗の真宗たる所以のところですが、同時にまた問題があるところですね。

西谷 曾我量深先生がね、あの法蔵菩薩は阿頼耶識なりとか、それから、ほとけは自となって……。

阿部 如来は我れなり、されど我れは如来に非ずとかいつて……。

西谷 そう。如来は我れなり、如来は我れとなって我れを救いたまう、というような言い方ですね。そうなる、非常に問題は接近してくる感じではないですか。言いは、禅の行き方と違いますが、非常に近くなってくる。

阿部 問題は、その場合の主体は何かということですね。パーメなんかもゼーエンズフト（憧憬）ということをいいますが、このズフトというのはちよつと願にあたるように思いますが、そうはならないのでしょうか。

西谷 願が基礎になるんだけど、願となるとむしろ愛、アガペーに近い。他を救うという仏教の菩薩道の立場ですね。ズフトというのは、どっちかというと盲目的な、ちよつと魔のほうに近づく方向もありそうですね。もともと、魔に近いんだけど、そういうなかで実はほとけを願っているんだ、ということになるかも知れないが、しかしもともと自分が何かいろうんことを欲しがっているということだから、魔の方に近い感じでしょうか。

二十、仏と魔の賭け

西谷 仏教でも魔の問題はお経などにはよく出て来るが、禅のようにお経にあまり関係ない立場でも時々顔を出している。昔よく読まれたらしい『靈源筆語』という本があって、靈源という禅師の書簡集ですが、朱熹や程

伊川なんかから貰った手紙の返事なども入っている。その本のなかにも魔の話が出ていて、昔それを何かの雑文に引用したことを覚えています。靈源もそれを何かお経のうちから引いているのですが、キリスト教にもあるのと似たような話なんだが、仏と魔との間の賭けの話ですね。西洋だと神とサタンとの間の賭けで、『ヨブ記』でも『ファウスト』のプロローグでもそうです。サタンが神に挑戦して、どっちが勝つかやってみようということ

で、その賭けが話全体の源になっている。仏教の話では、悪魔が仏に向って、あなたの仕事をぶち壊して見せまうと言う。仏さんが、どうやって壊すんだと問われると、魔は、自分も頭を剃って仏衣を着て、仏飯を食べる……。

阿部 ほとけに化けて……。

西谷 今の場合は、仏弟子に化けて、つまり僧侶の姿になってサンガ（仏弟子の組織）のなかへ潜入する。現代でも例えばコンムニストの細胞が相手方の組織のなかへ化けて潜入するという方式ですね。そういう高質なスパイ活動をやると魔が宣言するんです。魔王の手先きが、

坊さんの衣を着て、お寺のご飯を食べて、ほとけに礼拝しながら、仏の活動を破壊すると言う。仏様の方はそれに對して、仏法というものはいくらそんなことをしたって壊れるものではない。やりたければやってみろ、と……。

阿部 その話には、魔の本領がよく出ていると思いませんか。

西谷 あなたの言われた魔の問題は、いくらかそれに似ている。勿論、あなたの場合は、初めから目的意識的に仏法の破壊をというのとは違うわけですが。

阿部 つまり魔はほとけにもなりうる。ほとけの姿をとって自由自在に働くので、ある意味では魔のほうが仏よりも一段高いという一面もあるわけですね。

西谷 仏様の方では、本当の仏法はそんな魔法でも手の着けられんもんだと言っておられる。

阿部 結局賭けの結末はどうなるんですか。

西谷 この話は結末づきの話ではないですね。目出度し目出度しで終ったとか終るとかいうわけには行かない。だからこの本でも、この話を引いて、僧侶たるものは自分の脚元をよくよく気をつけろと言う……。

阿部 仏といわれているものも魔のあらわれかもしれない。仏魔団体ですからね。そうなりうる。ただ私の場合は、自分自身が魔ではなかったか、自分が善悪を越えた仏道を生きているつもりなのが、実は魔の生活をしていたのではないか、というあくまで魔の自覚という問題であって、昔からいわれているいろいろな魔の問題は、実はそのような魔の自覚なしには本当の意味はわからないのではないかと思うのです。

西谷 禅宗の伝法の歴史で、『景德伝燈録』というのがありますね。あのなかにもいろいろ出てくる。ぼくも昔読んで面白かった記憶があるので、一昨日ちょっと開いて見ました。その『伝燈録』の初めの部分にインドの禅史があって、初祖というのは摩訶迦葉、その次が阿難という順序になって、四代目がウパクッタと発音するのかな、優婆塞多という名前の尊者ですね。その尊者が仏教を盛んに弘めたので、「魔宮震動し、波旬（魔王）愁怖して、遂にその魔力を竭くして正法を害せんとす」とあります。尊者は三昧に入ってそういう事情を観て取る。魔王の方は、尊者が三昧に入っている間にこっそり瓔珞

の首飾りを尊者の頸にかける。普通ならこれは貴重な財宝を贈り物にすることですが、魔王には何かのたくらみがあったのかも知れません。尊者は定から出ると、首飾りに気がついて……、そこからおもしろい。尊者は人間と大と蛇との三つの屍を集めて、神通力で花鬘を作った。そして見事な首飾りをくれたお礼にこれを上げた。と、優しい言葉でいろいろ言う。魔王は喜んで頸を延ばしてそれを受ける。その途端に花鬘は三つの爛れた死骸になって、臭くてうようよ蛆がわいている。魔王もたまらなくなつて取ろうとするが、いくら自分の神通力を尽してもどうしても取れない。腐爛した死骸が魔王にはきれいな花鬘に見えたというんだから、これは死と悪魔との繋りという問題と関係しているんじゃないかと、ぼくは臆測しているんですが、よくわからない。

阿部 尊者の方が魔王をつかまえたわけですね……。

西谷 だから、魔王は尊者を幻惑できなかったのに尊者からは幻惑された。つまり、尊者と魔王との眼力も、その眼力と相応する世界も、いわば段が違っていたわけですね。とにかく、すっかり困った魔王は、天界へ昇って

六欲天（低い天界）の「天主」たちを訪ね、さらに梵天王まで訪ねて、頸の紐を解いてくれるように懇頼する。ところが、その天主たちも梵天王も異口同音に答えて、仏の十力を具えた仏弟子の所作である神変は、自分たちのような「凡陋な」者は如何とも仕難いと言う。そして、早く尊者の所へ帰って懺悔し、仏道に帰依する外に道はないと忠告する。それで魔も天から下って尊者の所に行き、尊者の命に従って、合掌しながら帰依三宝を三唱する。

阿部 魔王がですね。

西谷 ええ、魔王が。それと同時に花鬘がとれて仕舞う。それで波旬が歓喜踊躍して尊者を礼拝する、という話です。その話でおもしろいと思うのは、天界の神々（諸天主や梵王）が自分たちを「凡陋な」者と言うのに対して、尊者は魔王から「十力の聖弟子」と呼ばれている。つまり「凡」と「聖」との区別が絶対的で、魔王も梵天も「凡」、仏弟子が「聖」で、その間の力、神通力の差は決定的です。

ところが、魔の問題に関して、今の話と様子がすっかり違った話が禅にはある。その一例は、お釈迦さまに反

逆して危害を加えようとしたために地獄に落ちたという提婆達多の話です。その後で、お釈迦さまが阿難尊者を使者として地獄を訪問させます。阿難は提婆に、どうして居なされると聞くと、提婆はとても気楽で極楽にいるみたいだと答えます。これは必ずしも負け惜しみと解する必要はないので、似たようなことは禅でもよく言われています。しかし地獄はやはり地獄なので、阿難は地獄から出る気はないかと聞きます。（阿難は提婆といとこ何かの身近な関係です。）ところがそれに対する提婆の答えが面白い。それは、もし釈尊が地獄のなかへやって来るなら、その時は自分も地獄から出て行く、というので、これは禅者の関心を牽くところがあるらしく、虚堂がそれを取り扱ったのが『虚堂録』に載っています。

(完)

阿部君の出された魔の問題には、今の二つの話に現われている二つの方向が絡み合っているみたいなき感じ、これから充分究明されていい問題だとぼくも思います。

(にしたに けいじ・京都大学名誉教授)
(あべ まさお・クレアモント大学教授)